

一家計簿からみた戦中・戦後の家計

重川純子（埼玉大）

目的 大阪の会社経営者の家庭で昭和6年から昭和24年まで記帳された家計簿をもとに、家族の変化、時代の経過が家計構造に及ぼす影響を明らかにする。特に、記帳期間に含まれる戦中、戦争直後の衣食の家計消費の実態を明らかにする。

方法 記帳者である妻が月ごとに集計したものと日計簿を再集計し、支出を中心に分析を行った。

結果 本家計は夫婦と10人の子供を中心とした生活であり、記帳期間は子育て期にあった。夫の事業は終戦前は軍需産業として、その後も平和産業に転換し継続発展している。家計簿には収入の記録はほとんどないが、事業の好調が高い消費支出を維持する基となっている。記帳初年の昭和6年（家族5人）の消費支出額は591円と、同時期の家計*に比べ高い。食費実質値は昭和17年以降減少し、21年が底となるが、24年には16年以前の水準に回復している。21年の食費割合は30.7%と低いですが、農作物用費用割合が21.8%と高く、自給努力が行われている。終戦前は穀類の約9割は米であったが、22～24年には米の割合が低下し、麦、メリケン粉、パン・うどん加工割合が高くなっている。被服費は戦前は比較的高水準で、17年の衣料品切符制の実施後の18、19年は特に高いが、20、21年は極端に低い。貯蓄は昭和20年時点で、18、19年の年支出額の2.5倍額を保有しているが、インフレで目減りし、その多くは22年の財産税徴収に回されている。裕福な本家計であるが、食費、被服費の変化等で他の家計と同様の傾向が確認された。

*『家計簿からみた近代日本生活史』（東京大学出版会、中村隆英編、1993）A,D家計